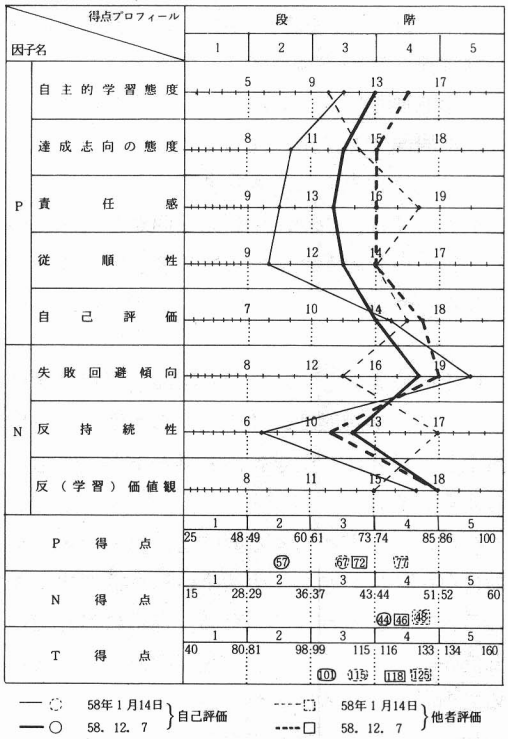
因子間のばらつきが大きい児童

事例３　小学６年Ｃ児（男子）

1.　学習意欲検査からみた児童像



(1)　本人の評価では，積極的因子については全体に低い評価である。素直さが足りず，責任感もなく投げやり的な面がみられる。それでいて自分は良く見てもらいたいと思って，表面的なことには積極的に活動しがちである。

(2)　教師の評価では，対象児は本人の評価よりも責任感があり，達成志向の態度，素直さ，学習の持続性においても十分あると思っている。

2.　学習意欲の背景

(1)　知能・学業

教研式知能検査ＳＳ61，ＩＱ115（４年時）

(2)　性格検査（ＹＧ）　ＡＢ型

神経質で主観的であり，活動性が高く，行動は衝動的な面もみられる。

(3)　不安傾向診断検査（ＧＡＴ）

対人不安，過敏傾向なところがあり，恐怖傾向，衝動傾向もみられる。

(4)　親子関係診断検査など

父親は，論理性が高くものごとを合理的に考える方で，順応性が足りない。母親は，やさしさを過度に発揮し，してはいけないことを知っていて子供を甘やかしている。

(5)　担任の所見

考え方が多少幼稚で，自己中心的な考え方が強い。

3.　心理的治療の仮説と方法

担任との信頼関係を基にして，従順性を高め，持続性を高めることによって，学習意欲を高めていくことができる。

(1)　興味を育てる動機づけや，目的目標をきめさせる動機づけを行い，学習への計画性を身につけさせることによって学習意欲を高める（行動療法的アプローチ）

(2)　本人の評価と教師の評価との著しい差の要因について明確にし，自己理解をさらに深めさせる。（カウンセリング的アプローチ）

(3)　集団活動などを通して，本人の主観的な考え方に気づかせ，協力的な行動，持続性，従順性の大切さを身につけさせる。（行動療法的アプローチ，ロール・プレイング）

4.　治療の実践

(1)　カウンセリング的アプローチ

○　９月26日　宿泊訓練の予備訓練で副班長になったが，整列の仕方，話の聞き方などが思わしくないため，先生方から訓練の目的，集団活動の中での役割，係としての責任のあり方，活動の自主性などについて話される。

○　10月２日　授業中の様子がおかしい（外の方ばかり見ている）ので，再三注意を与える。そのため，指示発問に注意を向けず，指名されても発問内容が理解できず，まわりから聞き出すといった状態であった。集中の仕方に